

# 日本近代史のなかの早稲田大学教旨

大日方 純 夫

## はじめに

早稲田大学は、現在、大学ホームページで「早稲田大学教旨」をつぎのように説明している。

1913（大正2）年、創立30周年記念祝典において、総長大隈重信（当時）は早稲田大学教旨を宣言しました。

早稲田大学の教育の基本理念を示す基本文書としての早稲田大学教旨は、高田早苗、坪内逍遙、天野為之、市島謙吉、浮田和民、松平康国などが草案を作成し、大隈重信が校閲の上祝典で発表したものです。1937（昭和12）年に教旨の碑文が早稲田大学正門前に設置され、今日に至っています。

大学ホームページは「教旨」全文を掲げたうえで、「教旨」の要である「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」のそれぞれについて、つぎのように説明している。

「学問の独立」——「学問の独立」は、「在野精神」「反骨の精神」と結び合います。早稲田大学は、自主独立の精神を持つ近代的国民の養成を理想として、権力や時勢に左右されない、科学的な教育・研究を行ってきました。」

「学問の活用」——「もちろん、近代国家をめざす日本にとって、学問は現実に活かしうるものであること、日本の近代化に貢献するものであることが求められました。つまり「学問の活用」です。安易な実用主義ではなく「進取の精神」として、早稲田大学の大きな柱の一つになりました。」

「模範国民の造就」——「庶民の教育を主眼として創設された早稲田大学。その3つめの建学の理念が「模範国民の造就」です。グローバル化が進展する現代、豊かな人間性を持った「地球市民の育成」と言い換えることができるでしょう。建学の理念とそこから生まれ受け継がれてきた早稲田スピリットは、私たちの財産。早稲田人がひとしく身につける校風です。」

では、この早稲田大学教旨は、どのような経緯のなかで宣言されたのか。早稲田大学の前身、東京専門学校が開校されたのは一八八二年である。教旨はその約三〇年後に宣言された。そもそも東京専門学校は歴史のいかなる段階において開校され、その建学には歴史的な段階性がいかに反映しているのか。そして、約三〇年の時間の経過と新たな歴史的状况は、教旨にどのような性格を付与することになったのか。しかも、教旨は宣言からさらに約三〇年後のアジア太平洋戦争の時代を経て、戦後、一九四九年に改定された。その間、教旨の碑は一九三七年に設置されたが、これは日中戦争全面化の年にあたる。一体、教旨にはどのような歴史性が刻印されているのか。

私はかつて（二〇〇二～〇三年）、早稲田大学教育総合研究所のプロジェクト研究「志立大学の研究」に参加し、早稲田大学の建学理念と教旨の歴史に考察を加えて、論文「早稲田大学の建学理念と教旨」をまとめた（大西健夫・佐藤能九編『私立大学の源流「志」と「資」の大学理念』学文社、二〇〇六年、に収録）。そこで、これに若干の改訂を加えて

以下に再掲し、早稲田大学教旨を日本近代史のなかでとらえかえすための参考に供することにした。

## 一 建学理念の創出—自由民権運動と「近代国家」の造出

### (1) 東京専門学校の開校

一八八二(明治一五)年一〇月、早稲田大学の前身である東京専門学校は開校した。開校式に際し、校長大隈英磨は「開校の詞」を朗読し<sup>(1)</sup>、そのなかで正科(「新主義ノ学」)を学んで「早ク之ヲ實際ニ応用」する「速成ノ教授」と、英語科(深く蘊奥を極めるための原書自読能力の教育)の二つの科を設けることを明らかにした。そして、これは目下の需要に供し、わが国に「学問ヲ独立セシムルノ地歩」をなそうとするからだと説明した。しかし、この二科の設置が、なぜ「学問ヲ独立」させることにつながるのかは明らかにしていない。

つづいて講師天野為之が演説し、東京専門学校議員の成島柳北が祝文を朗読した後、小野梓が演壇に立った。この小野の演説こそ、早稲田建学の精神として、以後、つねに顧みられることになるものであり、「学問の独立」の意味は、この小野演説によって明快に提示された<sup>(2)</sup>。

小野はまず、十数年後を期して学校の改良前進をはかり、邦語(日本語)をもつて教育する大学の位置に進めて、日本の「学問ノ独立」を助けることができるようにしたいと語った。そして、つぎのように述べる。

一国ノ独立ハ国民ノ独立ニ基ヒシ、国民ノ独立ハ其精神ノ独立ニ根ザス。而シテ国民精神ノ独立ハ実ニ学問ノ独立ニ由ルモノナレバ、其国ヲ独立セシメント欲セバ、必ラズ先ツ其民ヲ独立セシメザルヲ得ズ。其民ヲ独立セシメント欲セバ、必ラズ先ツ其精神ヲ独立セシメザルヲ得ズ。而シテ其精神ヲ独立セシメント欲セバ、必ラズ先ツ

其学問ヲ独立セシメザルヲ得ス。

今、アジアで独立の体面を全うしているのは、日本と中国しかない。しかし、日本も条約改正などの問題をかかえており、また、強国がすきを狙っているから、安心してはいられない。このような時に独立を全うするのは容易なことではない。「国民ノ元氣」を養成し、「独立ノ精神」を發達させなければ、「帝国ノ独立」は期待できない。精神を独立させる「永遠ノ基」は、学問の独立にある。しかし、日本では、古代以来、独立した学問によって子弟を教授したことがない。中国の文字を学び、英米の学制を模倣し、フランスの学風に似せ、今やドイツの学を授けようとしている。外国に依頼しては、学問を独立させることはできない。学問の独立をはかるためには、「講学」の「便宜」をはかり、「障礙」を取り除く必要がある。大隈公はかつてつぎのように自分に語った。日本で学問が独立しないのは、学者に名誉と利益を与えないからだ。皇室財産によつて学者を援助し、終世、学問の蘊奥を追究する便を得させ、学問を独立させるべきだ、と。確かにその通りである。同時に、自分の見解からすれば、外国の文書・言語でなければ高尚の学科が教授できないというのは、「講学」の「障礙」であり、「学問ノ独立」を妨げている。

小野はこのように演説して、「学問ノ独立」のための緊急策として、「講学」の「便宜」をはかることと、「講学」の「障礙」を取り除くことの二点を提起し、前者として、大隈の示唆による皇室財政からの経済的支援策を、後者として、自らのアイデアである邦語教育策をあげた。そして、前者については「内閣諸君ノ責」にゆだねることとし、後者こそが東京専門学校が担当すべき課題だとした。

この後、小野は、政治・法律の二学が特に速成を要するのは、社会的に需要があるからであり、政治の改良、法律の前進が日本の重要な課題になっているからだと述べた。つづいて、いずれ理學を設ける予定であることを展望した後、「英學ノ一科」を設けた意味を、原書を通じて直接に海外のことを究めることとあわせて、「本邦ノ学問ヲシテ其

独立ヲ全クセシメント欲セバ、勢ヒ深ク欧米ノ新義ヲ講ジ大ニ其基ヲ堅クセザルベカラズ」と説明した。そのうえで、英語を採用した理由を、「独逸ノ学」「仏蘭西ノ教」と比較して、「人民自治ノ精神」を養成し、「活潑ノ氣象」を發揮する点では、「英国人種ノ氣風」を推さざるを得ないからだとした。今、国家には課題が多い。少年子弟の自治の精神を養い、活潑な氣象を發揮させるべきだ。そのためには、「英国人種ノ跡」に従う必要がある。「英国人種」の学問の優秀さは政治上にとどまらない。そこで、東京専門学校では、ドイツを捨て、フランスを顧みず、英書によつて教育すべきだというのである。

小野は、演説の最後で、「本校ヲシテ本校ノ本校タラシメント欲スル」ことを強調した。東京専門学校を「政党以外ニ在テ独立」させようとしたのである。小野は述べた。自分は立憲改進黨員であり、黨員としての立場から言えば、学生全員を改進黨の主義にしたがわせ、その旗下に属させようとするのは当然だ。しかし、学校の議員としての立場から言えば、暗々裏に学生を誘導してわが党に入れようとするような卑怯な挙動を恥じる。本校の大目的は、学生諸君に速やかに眞の学問を得させ、早くこれを実際に応用させようとするところにある。卒業後、どの政党に加入しようと自由だ。小野は政党からの独立をこのように説明した。

以上が小野の開校演説の全体的な概要である。

## (2) 小野梓演説の構造

小野の演説は、おおよそ三つの部分から構成されている。第一は、「十数年」後の「大学」化を見通した将来展望である。「学問ノ独立」理念と邦語による専門教育の充実がこれに結びつく。それは、いかに教育するのかという教育の基本理念の表明であり、また、学校がいかなる方向を旨とするのかという経営方針の提示である。

第二は、当面、何を重点的に教えるのかという教育内容の選択に関する説明である。これは、さらに二点に分かれる。まず、正科として政治学・法律学教育を選んだ意味が、当時の日本社会の需要との関係で説明される。これは、現実の要請（「実際」の「応用」）に応えようとする教育姿勢の表明であるとともに、学校経営を成り立たせうる現実的な見通しを示すものでもあった。ついで、別科として英語科を置いた意味が、イギリス人の「気風」（「自治ノ精神」と「活潑ノ気象」）との関係で説明される。ここでは、国民精神のありように関する小野の強い期待が表明されている。注意を要するのは、小野がイギリスを賞揚するのは、イギリスの「国」としての優越性によつてはなく、「人」のありよう、その精神・気象にある。ここにも、「一国」独立の基礎は「国民精神」の独立にあるという立場がうかがえる。

第三は、より現実的・实际的な学校運営の構えについてであり、大隈の学校ではない、立憲改進黨とは別だという宣言である。当時の状況にあつては、これは極めて重要な意味をもつていた。専門教育機関として存立し、やがて大衆を目標とする東京専門学校にとつて、政党からの独立を宣言しておくことは、欠かせない重要事項であつた。それは、そもそも学校とは政党・政治から独立すべきものだという学校経営の基本理念にもつながっている。

小野演説における「学問ノ独立」理念は「一国ノ独立」と密接につながっており、そこには、「一国ノ独立」∨「国民ノ独立」∨「国民精神ノ独立」∨「学問ノ独立」という同心円的な関係があつた。また、「学問ノ独立」↓「国民精神ノ独立」↓「国民ノ独立」↓「一国ノ独立」という規定序列があつたともいえる。基本には、対外的な独立、とくに西洋世界に対する自立の要求があり、日本が当面していたナシヨナリズムへの強烈的志向性があつたと言える。したがつて、小野にとつての「学問ノ独立」とは、直接には西洋の学問からの独立であり、それを象徴するものが邦語教育だったのである。

しかも、その「独立」すべき「学問」として、まず、設定されたのは「速成」を旨とする政治・法律の二学であり、

また、英語教育であった。前者については、政治の改良、法律の前進という、当時の日本の現実的な課題が前提とされていた。後者の前提には、「人民自治ノ精神」と「活潑ノ氣象」への期待があった。これらは、ともに日本近代国家をいかに建設していくのかという基本構想と密接にかかわっていた。また、この点で、学問には単なる「学問」とどまらない実践的な意味・性格が期待されていたともいえる。小野の言葉を借りれば、「真正ノ学問」を教えて、これを「實際ニ応用」させることが、「本校ノ大目的」だったのである。

そして、小野演説の最後に登場するのが、「本校」の「政党」からの「独立」である。これは、敷衍すれば、「学校」と政治との関係ということになるが、それは「学校」の独立であって、「学問」の独立そのものではない。しかも、ここでの趣旨は学校の「公明正大」を宣言することであって、「学問ノ独立」論が主眼ではない。

こうして、自由民権運動のただなかで、東京専門学校は立憲改進黨との明確な区別を宣言して開校した。ただし、学校運営の人的な側面でも、目ざすべき近代国家の建設路線でも、立憲改進黨と東京専門学校とが重なっているのは言うまでもない。イギリスをモデルとした政治の改良・前進は、立憲改進黨の基本理念にほかならなかった。

## 二 建学理念の転回―日清・日露戦争と「帝国日本」への道

### (1) 創立一五周年・二〇周年―早稲田大学へ

一八九七（明治三〇）年、東京専門学校は創立一五周年を迎えた。七月、その記念式を兼ねて第一四回得業証書授与式が挙行され、大隈重信もこれに臨席した。日清戦争が終って二年目、この時、大隈は第二次松方正義内閣の外務大臣をつとめていた。

大隈が公式に同校の儀式に参加するのは、開校以来、これが初めてであった。校長鳩山和夫の訓辞（病気のため幹事市島謙吉が代読）、総代の答辞、市島幹事による学事報告、校友会総代の祝辞、来賓の貴族院議長・公爵近衛篤磨の訓辞につづいて、式典の最後に大隈が登壇した。

大隈は、まず、学校の創立についての自らの「理想」を、つぎのように語った。<sup>(3)</sup> 維新後、あらゆる学問が西洋の学問になってしまった。これでは、「日本の学問の根底がない、此日本といふ大国に少しも学問の根底がない」。「外国の法」によって日本人が教育されるのでは、「国の独立」が危ない。「どうしても学問は独立させなければいけない」。「日本語を以て十分高尚の学科を教へる所の学校を拵へることが必要である」。

これが大隈にとつての「学問の独立」であった。大隈は小野梓らにこれを話して、その結果、ついに「邦語を以て高尚なる学問を教へる」端緒が開かれたと語った。したがって、「学問の独立」に関する大隈の認識は、小野と基本的に一致している。

こうした理念面の回顧につづいて、大隈は「種々の敵」「種々の誤解」「離間中傷」など、これまでに蒙ってきた「非常なる困難」に触れて、学校と自らの関係を、二つ点から位置づけた。

すなわち、第一に、学校は決して一人のものではないとして、「国のもの」「社会のもの」であることを強調した。東京専門学校に関する国家的・社会的な側面の強調である。では、なぜ文部省の管轄下、すなわち国立としないのか。それは、文部省が何から何まで出来るものではないという限界性の指摘とかわわっている。「私立で権力のもとに支配されずして、さうして独立して意の向ふ所に赴くが必要」だというのである。その意味で、大隈は一方で、「学校」（学問ではない）の「独立」を政治権力からの独立という面で強調した。しかし、他方で「私立は矢張り必要」と述べて、国立の補完という面から私立の国家的な性格を説明した。



第二に、大隈は学校と自己とのつながりを、学校を寺にたとえ、自らを檀家になぞらえて説明した。「学校のやうな貧乏な御寺」としては、たくさん檀家をこしらえることが必要であつて、そこから「賽銭をドンドン寄進しなければならぬ」というのである。学校経営の観点からの説明である。

その五年後の一九〇二年、東京専門学校は組織・機構を改めて「早稲田大学」となった。創立二〇周年の年である。一〇月、記念式と早稲田大学開校式が挙行された。<sup>(4)</sup> 校長鳩山和夫の開会の辞につづいて、学監高田早苗が創立以来の歴史と大学とする理由について報告し、大隈が演説した。

高田は報告のなかで、大学組織に改めることになった「外部の事情」にふれ、「国家教育の御手伝ひをしたい」ということであると説明した。<sup>(5)</sup> 国家の高等教育に対する設備が不完全なため、高等教育を希望する中学卒業生が年々増加しているにもかかわらず、高等学校に入学することができないでいる。この有様を見越さずことはできない。そこで、私立学校ではあるが、「御手伝ひ」したいと考えたというのである。「私立学校」の役割を「国家教育」との関係で説明したという点では、一五周年記念の際の大隈演説と共通している。「国家教育」に対する補完的機能をもって、その「国家的・公的性格を強調しようとしたのである。

高田報告が重要なのは、これに続いて、後に教旨に結実することになる基本理念を語っている点にある。「実用的の方針」と「模範的国民を造る」ことの強調である。高田は、東京専門学校当時から、学校の目的を質問された際には、自分は「模範的国民を造る」ことであると答えてきたと説明した。その上で、大学であるならば、いわゆる「受験的教育」はなるべく避けて、「模範的国民を造る」こと、「人物を養成する」ということが目的であると思うと述べた。以後、高田はこの「模範的国民」理念を一貫して強調しつづけていくことになる。

9 これに対して、大隈演説のポイントは「学問の独立」にあった。大隈は「学問の独立」について、これは二〇年前

に突然考えたというわけではないとして、つぎのようにその趣旨を説明した<sup>(6)</sup>。

国民の意志が常に政府と同一になるといふことはない。ある場合には、政府の意見と国民の意志が背馳することもある。教育が一つの勢力のもとに支配されていると、あるいは国家の目的を誤ることがありはしないか。あらゆる勢力から離れて学問が独立するということは、あるいは国家に貢献するうえで大いなる利益ではないか。ことに、このような学校が盛んになれば、自ずから官立・公立の学校にも多少切磋琢磨の利益を与えはしないか。

ここでの大隈は、もっぱら「学問の独立」を「国家の目的」との関係で説明している。すなわち、「国民の意志」と「政府の意見」を区別したうえで、政治勢力からの「学問の独立」が守られてこそ、教育は「国家に貢献」できるというのである。換言すれば、教育・学問は政府などの政治勢力から「独立」し、「国民の意志」に依拠することこそ、長期的には「国家に貢献」する道だということになる。

こうして、小野がその将来を展望した「十数年ノ後」、東京専門学校は早稲田大学となった。しかし、大隈が演説のなかで「小野君をして席に列せしめたならば」と語ったように、当の小野は一八八六年に死去して、すでにいない。そして、「独立」への関心よりも、国家への貢献に対する関心の方が強くなってきたともいえる<sup>(7)</sup>。

## (2) 創立二五周年——大隈総長の誕生

早稲田大学の創立者は、言うまでもなく大隈重信である<sup>(8)</sup>。しかし、不思議なことに、創立以来、「大隈」と「早稲田」とは、制度上、まったく無関係であった。大隈はいかなる「早稲田」の役職にもつたことはなかった。大隈は、立憲改進黨の党首にかつがれて以来、途中で一時、退いたことはあるものの、進歩党、憲政本党と、改進黨系政  
党の党首の位置にあった。したがって、開校以来、「早稲田」は政党からの独立を、大隈と無関係であることをもつ

て証明してきたともいえる。しかし、一九〇七（明治四〇）年四月、創立以来二五年目にして、大隈は早稲田大学のトップの位置につくことになった。この年一月、大隈は憲政本党の総理（党首）を辞していた。

一〇月、創立二五周年祝賀の式典が挙行された。<sup>9</sup>式典では、学長高田早苗が経営の現状と課題について演説し、総長大隈重信も第二期拡張計画について語って、資金の必要性を訴えた。

二五周年とかわかって、『早稲田学報』は〈早稲田紀念号〉を発行したが、<sup>10</sup>大隈はこれに「早稲田大学の過去現在将来」と題する文章を寄せた。

大隈は、まず二五年前を回想し、「世間では政治上の目的の為に学校を設けたと誤解して、為めに最初学校の発達は甚だ緩慢であつた」、「官辺の権力」による妨害といった、「今日では殆ど想像の出来ぬやうな不思議な現象が起つた」と、当時の困難を語っている。経営上の苦難である。したがって、この学校に尽すものは、「国家的、献身的、熱烈強固なる意志がなければ出来なかつた」とする。その「意志」とは「学問の独立」である。今日の基を開いたのは、「学問の独立」を生命として、「一家一門温かき情誼を尽し」、この目的の前には情実を許さないという「協力一致の大方針」のもとに尽力した結果にほかならないと強調した。大隈は「学問の独立」について、「国民精神の独立を期すると云ふ主義」だと説明している。かつての小野と基本的に共通する理解である。「学問の独立」は「国民精神の独立」を介することによって、「一国の独立」という「国家的」な課題に連結していく。

つづく学長高田早苗の文章は、「我が学園の教旨」と題されている。五年前、「早稲田大学」にした際に、「理想」「特色」が必要だと考えたとして、高田はこの理想・特色のことを「教旨」と呼んだ。では、早稲田大学の特色は何か。当時、特色にしようと思ったことは、「組織上の新機軸」と、「学理と実際との密接」の二つであったという。

11 前者の主な内容は、大学予科の年限を短縮して一年半とすること、中学卒業後、大学予科に入ろうとする者には、

入学試験を施行せず、入学後、教育して学力を平均させること、などであったが、これらはすでに他の私立大学も模倣しているので、「早稲田大学の教旨」とは直接に関係のないことだと高田は述べた。それに対して後者は、「教旨」に直接にかかわる。「実用的大学」にしようということの根本はここにあるというのである。

高田は、世界のあらゆる大学を通じ、大学の目的となつてゐるのは、「人物の養成と専門学の研究」だとした。そのうえで、つぎのように述べた。

東洋の英国たる、わが大日本帝国でも、日露戦争以後国運が一層発展したと同時に、俊傑の士をまつて、解決を要する問題が俄に増加したのである。それにも拘らず、人物の供給は依然として往日の通りである、

高田は「わが大日本帝国」を「東洋の英国」と位置づけた。したがつて、「大日本帝国」にとつて、もはや「一国の独立」が重要な課題でありえようはずがない。「東洋の英国」の課題は何か。高田は、日露戦後の社会的な要請と関連づけて「実用的人物」を養成することの意義を語つた。「実用的人物」に求められるのは何か。

日露戦争以後、日本国民の任務は頗る重くなつた。自分が常に言つてゐる通り、世界政策の実行と立憲政体の擁護、此の二つは、日本国民の今後の大任務である。

「日本国民の任務」は、小野の段階、つまり自由民権期の段階とは異なつてゐる。高田にとつての課題は、「一国の独立」ではなく、「世界政策の実行」と「立憲政体の擁護」なのであつた。そして、このような課題を担うべき「日本国民」は「平和的一大軍隊」の「大小士官」たるべき「実用的人物」、「国家有用の人材」を養成することこそが早稲田大学の任務だとした。

その上で、「実用」は「浅薄」とは違ふとして、「学理と実際とを密接」させてその成果を社会に提供するために、一層の研究を要すると注意した。また、「所謂実用的人物は、一身の栄達、一家の繁栄に許り執念して、天下国家を

慮ることが薄いやうでは困る」として、「小利己」ばかりに眼をつけるような「邪道に踏み迷つてはならぬ」と釘をさした。各個人が繁昌すれば国家が富強になる。国家が富強になれば各個人が繁昌する。国家と個人の利害は一致する。高田はこのように主張して、早稲田大学の目的は、「標準的国民」を作ることにある、「実用的人物」がすなわち「標準的国民」にほかならないとした。小野が「国民精神ノ独立」を「一国ノ独立」に結びつけたのに対して、高田は「個人の繁昌」を「国家の富強」に結びつけたといえる。精神性よりも実践性、「独立」よりも「富強」に、高田は力点をおいていたといえる。

翌一九〇八年、早稲田大学の「国家」性を刺激する出来事があった。五月、学科増設のための資金として、皇室から下賜金が提供されたのである。『早稲田学報』（感謝号）（一九〇八年六月）には、学長高田早苗の新生入生に対する訓示が掲載されている。

高田は、天皇から恩賜金を受けた荣誉にふれて、早稲田大学の責任が非常に重くなつたと強調した。そして、私立であつても、官立の学校に譲らないという抱負をもたなければならない、恩賜金によつて、過去の実績が認められ、将来に向けて拡張するための資が提供されたのだから、自信をもて、と訴えた。そのうえで、早稲田大学の目的は、「高等国民を養成すること」、「専門家を仕立てる」ことにあるとした。「高等の国民」とは、「普通の国民」を率いて、「国家の一員」としての修養を与えていくべき人材のことである。

### 三 教旨の制定と展開―大正デモクラシーと「立憲帝国」化

#### (1) 創立三〇周年―教旨の制定

一九二二（明治四五）年、早稲田大学は創立三〇周年を迎えた。これを記念する一環として定められたのが「教旨」である。発案者は高田早苗という。かねて、大学には「理想」「特色」が必要だとして、これを「教旨」と呼んでいたのは高田であったから、当然と言えば当然であろう。

教旨の起草委員は天野為之・坪内雄蔵・浮田和民・松平康国・塩沢昌貞・金子馬治・中島半次郎の七人であった。まず、中島が草案を作成し、これを坪内が改作して、委員会の討議を経て最終草案を作成し、大隈の意見も取り入れて確定されたものだとい<sup>(1)</sup>う。重要な文書であるから、全文をそのまま掲げておく。

#### 早稲田大学教旨

早稲田大学は学問の独立を全うし、学問の活用を效し、模範国民を造就するを以て建学の本旨と為す。

早稲田大学は学問の独立を本旨と為すを以て、之が自由討議を主とし、常に独創の研鑽に力め、以て世界の学問に裨補せん事を期す。

早稲田大学は学問の活用を本旨と為すを以て、学理を学理として研究すると共に、之を實際に应用するの道を講じ、以て時世の進運に資せん事を期す。

早稲田大学は模範国民の造就を本旨と為すを以て、立憲帝国の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を發達し、国家社会を利済し、併せて広く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す。

①「学問の独立」と、②「学問の活用」と、③「模範国民の造就」の三点がその柱である。①は、「自由討究」、「独創の研鑽」を通じて、「世界の学問」に貢献すること、②は、学理を實際に応用することを通じて、「時世の進運」に貢献すること、③は、個性を尊重し、身家を發達し、国家社会を救済し、世界的に活動する人物を養成することであるが、ここで見落とすことができないのは、個性尊重の直前に「立憲帝国の忠良なる臣民として」という文言がすえられていることである。

創立三〇年紀念祝典は、明治天皇が死去したため、翌一九一三（大正二年）一月一〇日、六日間にわたって挙行された。<sup>(12)</sup> 式典では、高田学長の挨拶、渋沢栄一基金管理委員長の報告につづいて、大隈総長が式壇に立ち、早稲田大学の「教育の趣旨」、すなわち「教旨」（前述）を宣言した。教旨について、大隈は、要旨、つぎのように説明した。<sup>(13)</sup>

世界の文明は日に進歩している。そうしたなかで国と社会のために大学教育を行うためには「雄大な理想」がなくてはならない。自分の理想は、「文明の調和者」として、「東洋の文明」と「西洋高度の文明」を調和させることにあつた。そのためには、「学問の独立、学問の活用を主とし、独創の研鑽に力め、其結果を實際に応用する」ことが必要だ。これに任ずるものは、「個性を尊重」し、「身家を發達」し、「国家社会を利済」し、「広く世界に活動」することをもつて自ら任じ、また、その任に堪える人格にある。これが「模範国民」である。

大学に学ぶものは多数国民のなかの少数だから、この少数の高等教育を受けたものが「国民の模範」、「国民の中堅」となることによって、「国家を堅実に發達」させ、「文明的事業の急先鋒」となるのである。「模範国民」となるためには、知識だけでなく、「道徳的人格」を備えなければならない。「一身一家、一国の為」だけでなく、「世界に貢献する抱負」がなくてはならない。知識を吸収することのみに汲々としていては、人間は利己的となる。進んで国と世界のために尽すという「犠牲的精神」は段々衰えてくる。これは「文明の弊」であり、この弊を避けて利を収めるの

が「模範国民」たるものの責任だ。これが、早稲田大学の教旨の「最も根本を為すべき要点」である。

大学のために力を尽せば大学が盛んになり、大学が盛んになると同時に国家もますます盛んになる。国家の目的とこの早稲田大学の目的は必ず一致する。

大隈はこのように述べて、「学問の独立」の意味を、年来の主張である東西文明の調和に結びつけて説明し、「模範国民」をその中心的な担い手として想定した。大隈は、「国家の目的」と「大学の目的」は一致すると見た。ただし、大隈の場合、「国家」を超え、「世界」へと視野が開かれていることに、議論の特徴はある。「一身一家」↓「一国」↓「世界」へと向かう「貢献」の流れのなかに「模範国民」を位置づけ、その養成をこそ大学の使命としたのである。この点で、三〇年前の創立当初とは、時代状況も、教育が担うべき課題の位置づけも異なってきた。

## (2) 高田早苗の「模範国民」構想

では、教旨のもととの発案者、高田早苗は「模範国民」をどのようにとらえていたのか。教旨制定三年後の一九一六（大正五）年四月、高田は京都公会堂で「模範国民の養成」と題して講演した。<sup>(15)</sup>そこに、高田の「模範国民」像をうかがうことができる。高田は言う。

「国家の存亡興廢」は、「一般国民」を率いてその模範となる「中等社会の人間」がしっかりしているか否かにかかっている。しかし、一概に「模範国民」と言っても、その「時代」、その「国情」によって、それぞれその「資格」は異なる。

高田は、「模範国民」を、時・場を超えた普遍的なもの、一般的・抽象的なものではなく、すぐれて時代性を帯びたものとしてとらえた。では、今ほどのような「時代」であり、どのような「国情」に当面しているのか。高田はつ



づけた。「明治創業時代」に出来た「外形」を完成すること、つまり、「戦勝の跡始末を着け其基礎に由つて海外に発展する事」、「憲政有終の美を濟すと云ふ事」が、これからの青年がなすべき「仕事」である。その完成の仕事をし得る人間が、すなわち今後の「模範国民」である。

高田が演説しているまさにその時代は、対外的には第一次世界大戦の戦時であり、国内的にはデモクラシー気運の台頭期にあつてゐた。そうしたなかで高田は、今後の「青年教育の方針」を、①「何処迄も対外観念を發達せしむる」ことと、②「立憲思想を普及せしむる」ことの二つに設定した。高田はすでに一九〇〇年、巡回講話の際の講演のなかで「立憲思想の普及」と「対外観念の發達」の二つを「国民教育の方針」として提起してゐたが、それが「模範国民」像と結びつけられたのである。この段階における「模範国民」養成の課題は、「対外観念の發達」と「立憲思想の普及」の二点に集約されたといえる。

それは、いわゆる大正デモクラシー期に相応しい「立憲帝国」の「模範国民」像だといつてもよい。その意味で、教旨のなかの「立憲帝国の忠良なる臣民」の部分とのかかわりでは、後半にある「忠良なる臣民」としての「模範国民」というよりも、前半の「立憲帝国」の「模範国民」としての資質の養成を求めていたとみることが出来る。

その後、一九二二年一〇月の創立四〇年式典の際、高田は「将来の施設と模範国民の養成」、および「学問の独立の意義」にも簡単に言及しているが、立ち入った議論ではない。<sup>(17)</sup>

一九二七年四月の卒業式の際に、高田はあらためて「多数の模範的国民と少数の学者」について弁じている。<sup>(18)</sup>「一般国民」の先導者たるべき「模範的国民」たれ、と要請したのである。その際にも、「模範国民」のあり方、その「内容」は、「時」によって異なり、「時勢」に従つて変わると述べている。ただし、「内容」にまで言及することはなかつた。

同年一〇月、創立四五周年の記念式典が大隈記念講堂の竣工祝賀を兼ねて挙行された。国歌斉唱につづいて登壇した高田総長は、「学園の過去及将来」と題して式辞を述べた。<sup>(19)</sup>高田は、学園の近況や大講堂竣工の意義などを語った後、大学は理想をもたなければならないとして、三〇年式典の際に定めた三つの教旨についてあらためて説明した。

大学はたしかに「大学者」を造らなければならないが、これはそれほど多くは必要ない。修めた学問を実際に活用する人を造らなければならない。ことに多数の「模範国民」を造ることが大学教育の「大任務」だ。「模範国民」とは、一般の国民の上に立って、国民を率いて、「国家を泰山の安きに置く」だけでなく、ますますこの「国家を進歩発達」させるものだ。

高田はこのように述べたが、教旨三点のうち、一貫して高田が最も重視し続けたのは、三点目の「模範国民の造就」にほかならなかった。

#### 四 教旨の旋回と建学理念―戦争・ファシズムと「戦争国家」化

##### (1) 創立五〇周年・小野没後五〇年

一九三二（昭和七）年一〇月、創立五〇周年記念式典が挙行された。満州事変のちょうど翌年のことである。この式典には秩父宮が参席した。<sup>(20)</sup>「君ヶ代奏楽」につづいて「宮殿下臨場」。その後、式は開始され、「天皇皇后両陛下万歳三唱」の後、閉式となった。前年、高田早苗に代わって総長となった田中穂積は、式辞の最初に秩父宮差遣の沙汰書を朗読した後、創立五〇周年を記念するのは、将来の一大飛躍を期するためだとその意義を語り、また、私学の意義を強調した。しかし、建学理念や教旨については言及していない。

むしろ、早稲田の建学理念を想起する機会となったのは、一九三五年の小野梓没後五〇年記念の折であった。この時、大学に対して富山房から寄付金とあわせて胸像の寄贈があった。かつて小野が創業した東洋館書店の事業と志を継承したのが富山房だったからである。小野梓先生記念講演会では、高田が小野の思い出を語り、常務理事金子馬治が「小野先生学問の独立の意義」と題する講演を行った<sup>(2)</sup>。金子は、ほぼ半世紀前の時代状況の中にあつて、「学問の独立」という理念に小野が込めたものが、一体、何だったのかを、再解釈しようとした。

金子は、「独立といふ言葉は、明治維新当時の時代語、時代精神を代表する合言葉であつた」と述べた。当時、東洋はインドをはじめとして、皆、独立を失つてしまつていた。そうした中で、「世界に覇を唱へてゐた英吉利民族の独立の気象、斯ういふ独立の風潮が日本にどンドン這入つて来た」というのである。しかし、インドをはじめとする他民族の独立を侵害しているのは、実は「独立の気象」を象徴する国家イギリスである。そして、小野が学んだのは、そのイギリスにおいてであつた。

金子は言う。「小野先生は直接に英吉利民族の独立を学ばれたのであるから、独立といふ言葉は其の当時如何に深い意味を持つて居つたか、而して如何に複雑な意味を持つて居つたか、容易に我々は想像が附くのであります」と。近代国民国家にとつての「独立」とは、まずは、他国からの独立を意味した。しかし、その国民国家の膨張としての帝国化は、他民族・他国家の独立を否定することになる。その意味で、「独立の気象」に富むが故にこそ、逆に他民族の独立を侵害していくという、一種の転倒現象が起こる。金子が言う「複雑な意味」という表現は、このような事態を想定したものとも考えられる。

したがつて、小野が演説した自由民権期の段階では、「独立」概念には、欧米から「独立」の精神を学び取ることによつて、逆に欧米による支配を押し返し、アジア（日本）の側の「独立」を実現するという意味合いが込められて

いたと見ることが出来る。

金子は、以上をふまえ、小野の開校演説には、「三つの大きな精神」が含まれていたと主張した。すなわち、第一に、学問の究極の目的は「一国の独立」にあるということ、第二に、学問は他の力から独立した「最高の地位」をもつということ、第三に、他に頼らない精神、「独立の気象」こそが重要だということ、の三つである。

金子は、第一の「一国の独立、日本国家の独立といふことが学問の究極目的と考へられてゐた」という点について、この「大きな高遠の理想」の中には、さらに細かい三つの重要な意味が含まれていたと述べた。その一は、当時、学問は外国の学問、外国人の学問であつたが、外国の学問では国の独立はできない、「日本人の血液が注がれた学問」こそが大学の学問でなければならぬと考へていたということ、その二は、学問と精神とを並べて考へていたこと、学問とは即ち人物を練磨することだと考へていたこと、その三は、大学教育、学問の独立の究極の目的は国家にあると考へていたこと、の三点である。

第二は「学問の尊厳」にかかわるが、これについて金子は、「他の手段方便とされてはならない」、「他の例へば政党とか学問以外の力とかいふやうなもの、束縛を受けてはならない」、「飽く迄他の力から独立した最高の地位を持つてゐなければならぬ」と主張した。

第三は、「我々学園に居る者に取つて、最も實際的な、又最も切実な指導方針であると考へられる」点である。「精神力、努力奮闘」「大勇猛心——他力に頼らない大努力！大根気」、こうした「独立の気象」こそが「本大学指導精神の中心」だといふのである。したがつて、早稲田大学においては、「英吉利国民の独立の気象」に学んで、「英吉利流の独立自治の国民」を養成しなければならない。「早稲田魂」とは、「目的貫徹のためには精魂を尽して奮闘努力する、根気で進む、意気で行く」ことだ。

金子講演の趣旨は、以上の通りである。しかし、果たして金子が言うように、早稲田大学は「学問の独立」を貫徹し得たのであろうか。また、養成すべき「模範国民」は時代によって相違すると高田は述べていたが、デモクラシーの時代が終止符を打った時、どのような「模範国民」が求められることになったのであろうか。

## (2) 国策と「模範国民」のゆくえ

一九三七（昭和一二）年四月、総長田中穂積は『早稲田学報』に「皇紀二千六百年創立六十周年記念事業に就て」と題する文章を載せて、<sup>22</sup>今年は大隈の生誕百年にあたるので記念式を一〇月に予定していることを明らかにした。

一方、早稲田大学は、一九四〇年を期した「皇紀二千六百年・創立六十周年記念事業」に着手した。隣接地域に敷地を拡張して、「一大飛躍」をはかろうというのである。その際の呼びかけ文は、「大隈老侯」は「模範国民として天壤無窮の皇運扶翼に貢献するを以て学徒の責務なりと訓され」たと述べている。しかし、いつ大隈がこのようなことを語ったのであろうか。

この年、一九三七年七月、日中両国は全面戦争へと突入していった。このため、「大隈老侯生誕百年記念祭」は一時期が決定された。しかし、他方、八月、政府が「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定し、国旗の適時掲揚を求めたため、大学当局は「大隈老侯生誕百年祭の記念事業」の一環として、国旗掲揚場を新設し、教旨を掲げた「建学之碑」を設置することを決定した。<sup>23</sup>

一〇月二日、大学を代表して総長らは明治神宮に参拝。そして、明治節の十一月三日を選んで国旗掲揚式と建学之碑除幕式を挙行了た。<sup>24</sup>式次第は、宮城並びに明治神宮遥拝、国旗掲揚（国歌吹奏）、建学之碑序幕、総長訓話、聖寿万歳三唱、校歌合唱、であった。田中穂積総長はつぎのように訓話した。その一部を抜粋する。

「一死報国の忠魂義肝に至つては世界に其の比を見ざる所であります。」「我が皇軍にありましては捕虜の屈辱を蒙るよりは寧ろ死を見る帰するが如く笑つて其一命を君国に為めに捧ぐる其壮烈なる態度は恐らく白哲人にあつては想像だも及ばざる所であらうと思ふのであります。」

この「壮烈なる態度」が何によつてもたらされたかといへば、それは「建国の昔から万世一系の天皇を戴き皇室を中心とした大家族国家」、「皇室の恩寵に浴する感激が凝つて此の忠魂義肝となつたもの」だとする。そして、「皇室に対する純真なる感激と、伝統に対する矜持」、「此の感激、此の矜持こそ日本精神の真髓であると私は確信する」、「忠誠、献身の純情程崇高なるものはない」、「大義の為に自己を滅する」、などと強調した。

このように田中総長は、天皇制国家の独自性・優越性を強調し、「一死報国」の精神を最大限に美化した。そのうえで教旨に言及した。しかし、田中総長は「学問の独立」には全く触れていない。注目するのは教旨のなかの「模範国民の造就」だけである。しかも、大隈を引き合いにだして、大隈はこれを早稲田大学の使命だと天下に説明したと強調した。「早稲田学園」に身を置くものは、「模範国民」として「社会の儀表」となるべき義務を担っている。「明治大帝が勅語に仰せられた天壤無窮の皇運扶翼の為に、我々は国民の先頭に立つて働くべき義務を有する」というのである。

こうして、国旗掲揚式と同時に、教旨建碑の除幕式が挙行された。「未曾有の国難」を強調することによつて、「教旨」は「国旗」すなわち国家と一体化された。教旨は、「他の官公私立の大学になくして独り我学園のみが彼の偉大なる創立者に拠つて与へられた」ものであると位置づけられた。「模範国民」像は、「忠良なる臣民」像と一体化されたのである。

学生は教職員に引率されて明治神宮に参拝し、また、大学の創立記念日には招魂祭の例祭が執行された。戦時下の

早稲田大学にとって、「学問の独立」とは、一体、何であったのであろうか。こうして、早稲田大学は戦時下の挙国一致体制に組み込まれていった。この点を、『早稲田大学百年史』は苦渋に満ちた筆致で、以下のように記している。<sup>25)</sup>

学苑の国策協力への著しい傾斜現象は、政府の強力な教育行政により余儀なくされたとはいえ、戦時下の異常な挙国一致体制の中で、時には単に受身としての協力に止まらず政府の文教政策を率先して支持するとともに、他の諸大学の模範的存在ともなり、積極的な対応措置を講じた面があったのは事実であった。(中略)私学であるが故に却ってその積極性を一層發揮せざるを得ない場面に直面し続けたことを意味するものでもあった。

大学主催のもとで、南京陥落祝賀式(一九三七年)、漢口陥落祝賀式(一九三八年)などが挙行されていた。逆に思想調査・思想弾圧が「学問の独立」を脅かし、教旨の自己否定へと追い込んでゆく。一九四〇年の津田事件にそれは象徴された。同年、早稲田大学は皇紀二千六百年奉祝創立六十周年記念式典を挙行了た。

### むすびにかえて

一九四五(昭和二〇)年八月、日本は敗戦し、占領下での戦後の時代を迎えた。一九四六年には新憲法が制定され、一九四七年には教育基本法と学校教育法が成立した。このような法律との関係や、戦後の新しい思潮との対応において、教旨を改訂すべきだという意見が広がったのは、当然といえば当然のことである。「立憲帝国の忠良なる臣民」を養成するという「模範国民」理念は、果たして国民主権・基本的人権を基本理念とする戦後の新秩序と両立しうるのか。高田流に言えば、戦後の「時代」「国情」にふさわしい「模範国民」に要請される資質はどのようなものであり、また、それを如何に養成していくのか。

一九四七年一〇月、教旨改訂を検討する委員会が設置されることとなった。<sup>(26)</sup> 委員会では、各委員が各自の改訂案を出し、これを検討した結果、最終的に二つの委員会案がまとめられたという。

一つの案は、教旨を全般的に改訂しようとするものであった。これを当初からの教旨と比較してみると、用語表現の問題を別とすれば、つぎのような特徴を認めることができる。

まず、教旨の第一の柱〈学問の独立〉については、「自由討究を主とし」を「自由な研鑽を促進して」に、「独創の研鑽」を「真理の探求」に、「世界の学問に裨補」を「世界の文化の創造と発展に貢献」に変えようとしている。学問研究的な性格から、「真理の探求」と「文化の創造」に重点を移そうとしていることがわかる。

第二の柱〈学問の活用〉は〈学問の総合的発達〉と〈活用〉となり、目的を「時世の進運」に資することから、「人類の福祉の増進」に奉仕することに変えようとしている。

最も変化が大きいのは第三の柱である。〈模範国民の造就〉を否定し、〈人格の完成をめざし〉に変えるという案である。もちろん「立憲帝国の忠良なる臣民として」は削られる。「個性を尊重し」を「個性ゆたかにして」に、「身家を発達し」を「進取の気象に富み」に、「国家社会を利済し、併せて広く世界に活動す可き人格を養成」を「国家社会の形成者として有能達識な人材を育成」に変えようとしている。

「学問の独立」と「学問の活用」について、その新たな発展をはかりつつ、「模範国民の造就」の部分に抜本的な改訂を加えようとしたのである。

これに対して、もう一つの案は、単にこれまでの教旨から「立憲帝国の忠良なる臣民として」の一四字だけを削除して新しい教旨とするというものであった。

委員会の案をうけて、一九四九年四月、理事会、維持委員会で検討された結果、結局、後者の案、すなわち一四字



の、教旨全体はそのまま維持されたのである。

## 註

- (1) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』(以下、『百年史』)第一卷(早稲田大学、一九七八年)四五八ページ。
- (2) 同前、四六一～四六六ページに全文が掲載されている。なお、小野のこの演説については、中村尚美『学問の独立』(北樹出版、一九八八年)三七～四六ページを参照。また、小野と草創期の東京専門学校とのかわりについては、佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』(早稲田大学出版部、一九九一年)二四～七二ページに詳しい。
- (3) 『早稲田学報』五号、一八九七年七月。
- (4) 『百年史』第二卷(一九八一年)二八～三五ページ。
- (5) 『早稲田大学開校・東京専門学校創立廿年 記念録』(早稲田学会、一九〇三年)一七ページ。
- (6) 同前、二五～二六ページ。
- (7) この点については、前掲中村書、一〇二ページを参照。
- (8) 大隈と早稲田大学との関係については、前掲佐藤書、五～二三ページを参照。
- (9) 『百年史』第二卷、一五二～二六一ページ。
- (10) 『早稲田学報』一五三号、一九〇七年一月。
- (11) 『百年史』第二卷、六八二～六八三ページ。
- (12) 同前、六七九～六八一ページ。
- (13) 『早稲田学報』一二五号、一九一三年一月。
- (14) この点については、真辺将之「高田早苗における「模範国民」」(早稲田大学大学史資料センター編刊『高田早苗の総合的研究』二〇〇二年、一一一～一五七ページ)を参照。
- (15) 大日本雄弁会編『高田早苗博士大講演集』(大日本雄弁会講談社、一九二七年)二八九～三二四ページ。
- (16) 『早稲田学報』四五号、一九〇〇年一〇月。
- (17) 前掲『高田早苗博士大講演集』一六七～一七二ページ。
- (18) 同前、四九～五〇ページ。
- (19) 『早稲田学報』三九三号、一九二七年一月。
- (20) 『百年史』第三卷(一九八七年)六〇六～六一〇ページ。
- (21) 『早稲田学報』四九〇号、一九三五年二月。
- (22) 『早稲田学報』五〇六号、一九三七年四月。
- (23) 『百年史』第三卷、六二九～六三〇ページ。
- (24) 『早稲田学報』五一三号、一九三七年一月。
- (25) 『百年史』第三卷、八一七ページ。
- (26) 『百年史』第四卷(一九九二年)、一〇六八～一〇七〇ページ。